

釧路南ロータリークラブ会報

第28回 例会報告 2010.1.29 通算1334回

・点 鐘 工藤会長

・ロタリーソング
「手に手つないで」



ソングリーダー 福井 克美会員

の魅力は、実生活では得る事が難しい、素晴らしい仲間との出会い、そして、何でも話し合える仲間との親睦だと思います。ロータリーの奉仕の哲学を忘れず「四つのテスト」を思い出し、実生活に振り回されて、出席率が低下しがちですが、何とか、この経済不況を乗り切り、ご家族の協力を得てロータリーを退会しないで頂きたいと願います。そして、今ロータリアン一人ひとりがロータリーの魅力を取り戻す努力が必要だと思います。更にCLPを上手く活用して、会員の退会者が出ないように改革する努力も必要だと思います。そこから、新たな会員増強が生まれるのではないでしょうか。

・結婚祝
森江 洋之会員 H6. 1.29 (16年目)

・会長挨拶



皆様こんにちは。今日は、会員の退会防止について少しお話させて頂きたいと思います。全国的に会員が減り続けております。何故、全国的に会員が減り続けるのかを考えてみました。今の経済不況の中、ロータリーを在籍する事が難しく、続ける事ができないロータリアンが増えているこの現実。更に苦しい経済状況を乗り切り、会社経営を維持しなければならない現実。高年齢化や体調不良、様々な退会理由があると思います。更に、ご家族の協力無しでは続ける事は難しいと思います。しかし、ロータリー

・幹事報告



- * 本日は、くしろサッポロ氷雪国体でホテル側の対応が出来ず、昼食のパンが手配できず出前弁当になりました。
- * ロータリーの友、ガバナー月信2月号を拝受しております。
- * ハイチ地震義援金の案内が、ガバナー事務所より届いております。
- * 先週の理事会の決議事項はホームページに掲載しております。

・委員会報告
親睦委員会

- ・本日のニコニコ献金
森江 洋之会員 結婚祝として

出席委員会

会員25名 14名出席 52%

・本日のプログラム

「 会員ミニ卓話 」

担当 社会奉仕委員会

清水 哲会員



1853 年浦賀沖に投錨した黒船を見た当時の人々はびっくりしました。「当時の日本商船である千石船、特大でも千八百石船程度でした。千石船で 150 トン位だったでしょうか」徳川に移る、それをはるかに上回る大きさと船体も黒く塗られておりました。いずれの船も三本マストの帆船でありましたが、その中の二隻が両舷側に、これまで日本人の誰もが見た事のない不思議な半円筒型の装置を付けておりました。その二隻の船の甲板からはマストと違う筒が伸びておりその先端から盛んに黒い煙を吐き出していたのです。しかも帆も張らず自ら動くその巨体は、遠くから眺める全ての日本人に大きな恐怖感を抱かせるのに充分でした。効率が悪くて今はありませんが外輪船でした。ペリーの率いてきた四隻の軍艦は旗艦サスケハナ 3824 トン、ミシシッピ 3330 トン、プリスマ 989 トン、サラトガ 882 トン、口径 25 センチの砲を各 9 門備えておりこの砲の射程 1500 メートルを誇っておりました。これは当時日本側が観音崎や館山に合計 19 門配置していた大口径砲と称去れていた口径 16 センチ、射程 500 メートルないし 600 メートル前後の砲などが全く足下にも及ばない強大な戦力であったのです。ペリーはまさに絵に書いたような「砲艦外交」の圧力で江戸幕府の門を開かせようとしたのです。当時の日本人は彼らの差を見せ付けられててもけして絶望しませんでした。ペリー来航の二年後には、早くも薩摩藩ではオランダ人に教えてもらい見よう見まねで蒸気船を造りはじめました。ペリー来航から七年後の 1860 年には、勝海舟、福沢諭吉らが、幕府の咸臨丸という船を操縦し、太平洋を横断、アメリカに渡りました。日本人がこんなに早く技術を習得する力を持っていた事に驚かされます。さらに驚くべき事に、黒船が来航して二十年ほど後日本は、当時まだ鎖国を続けていたお隣の挑戦に出かけていき、日朝修好条約という条約を結んで朝鮮を開国させました。どうしてこのような事が出来たか、その理由は朝鮮の江

華島に行った日本軍艦が浦賀沖に来航したペリーと全く同じ交渉のやり方をしたからです。司馬遼太郎の「歳月」という小説に次のように書いてあります。当時外務卿外務大臣の事ですがこれをつとめていた副島種臣は、米国の日本大使デロンに会い、言いました朝鮮は鎖国をしている。日本はこれに対して開国をすすめ、通商条約を結びたい、デロンは賛成しました。そこで副島は、デロンに頼みました「それについて、あなたの国のペリー提督が我が国の徳川幕府に対して行った交渉のやり方が参考になります。その記録があればこちらに見せて下さい」デロンは快く引き受け、その書類一切を日本の外務担当の役員に見せてくれました。記録の中には日本人を野蛮人あつかいをしている部分が多々あり、日本の外交官などもさすが愉快ではなかったと言います。しかしともかくペリーと同じ方法を用いて日本は最初の自主的な外交交渉を成功させる事が出来たのです。外国交際のルール当時は万国公法といました。これを教えてもらったばかりではありません。日本は近代的な国家や社会の仕組みをたくさんアメリカから学びました。日本はアメリカという先生の弟子のようでした。例えば 1872 年に小学校制度が始まり、翌年には一万二千を超える小学校が全国に誕生教員の養成が急がれました。文部省に雇われていたアメリカ人のマレーは、児童教育には、男子より女子の方が優れていると助言しました。その結果 1875 年、東京女子師範学校という女の先生を養成する学校が設立されました。明治時代の小学校に女の姿が多かったのはこのためです。まだ始まったばかりの小学校の授業に「唱歌」の時間がおかれていましたが何をしていたのかわかりません。そこで愛知師範学校校長の伊沢修二は自分が留学中に教えを受けたメーソンをアメリカから招き、教材作りや音楽教師の養成に着手しました。こうして 1881 年、明治 14 年最初の音楽教科書の「小学唱歌集」が出来上がったのです。日本は 1904 年明治 37 年満州のロシア軍を攻めついに日露全面戦争となりました。このいきさつは又別の機会にいたしますが、日本は苦しい戦いを続けながらやっと勝つことが出来ました。そうしてアメリカと講和条約を結びました。これは小学校の社会科教科書に出ております、アメリカの仲立ちはどのようにして実現したのでしょうか、日露戦争は日本が独立国として生き残れる事ができるか、それともロシアの植民地同様の国になるかの分かれ道になる戦争でした。日本よりはるかに大きな軍事力を持つロシア帝国と戦った日本は世界の予想に反して勝ち続けました。しかしその勝利は薄氷を踏むような危なかし

いものでした。日本海海戦で勝利した時点で軍事費の国家予算の八年分を使い切っていました。日本の国内には補充する兵隊はもう残っていませんでした。一方、満州には新手を加えて集結した七十数万のロシア軍がいました。戦争が続くと、疲れて弾薬も乏しくなっている二十五万の日本軍に壊滅的な打撃を与えるでしょう、何とかして講話にもちこみたいと思った日本政府は、アメリカに派遣していた金子啓太郎を通じてアメリカ大統領のセルドア・ルーズベルトに講話の仲立ちをしてくれるよう依頼しました。金子はルーズベルトと同じハーバード大学の卒業生で彼が大統領になる前から友人として親交がありました。ルーズベルトは快く承知してくれました。講和会議は1905年8月10日からアメリカのポーツマスで行われる事になりました。ロシア皇帝ニコライ二世は、交渉にあたるロシア代表ウイッテに「いかなる場合でも、一ルーブルの償金、ひとにぎりの領土も日本に譲り渡してはならぬ」と厳しく命じていました。交渉は困難を極め、決裂しかかりました。この時ルーズベルトが日本の苦境を救ってくれたのです。彼はひそかに両国の政府に次のような妥協案を示して両国の考慮を促しました〔日本は償金の要求を撤回する。ロシアは樺太の南半分を日本に譲る〕どうしてもロシアと講話を結びたかった日本政府にとってはこの妥協案は願ってもないものでした。ロシア皇帝も国内に厳戦気分が起きていた事もあり、ルーズベルト大統領の顔をたてて妥協する決心をしました。日本は破滅から救われました。ルーズベルトが日本に肩入れしたのは、金子との友情からだけだったのでしょうか、そうではありません。彼はロシア皇帝の専制政治を不快に思っていました。それに比べて、日本は開国してまだ五十年ほどしか経っていないにもかかわらず積極的に欧米の新しい政治思想を取り入れ立憲政治を行っていることに好感を持っていたのです。この仲立ちで1905年8月29日日露講和条約が結ばれました。社会科の教科書には「条約によって、樺太の南半分を日本の領土にすることロシアが清国から借り受けていた遼東半島と、南満州の鉄道の権利を日本に譲る事等が決められた」と書かれております。南満州の鉄道とは、ロシアが満州を支配するために敷設した東清鉄道の南半分です。又の名を南満州鉄道といいます。日本はこの鉄道を経営することになりました。当時の世界では、強い国が他国の経済的な特権をもつことが認められておりました。日本もこの特権をもつことになったのです。この地方はもともと遼河を利用して船でモノを運ぶのが経済の基本でした。南満州鉄道はこの川に添って敷設されました。鉄道はモノを速く大量に運ぶ事が出来ますから遼河の水運に代わる経済の基本として高い利

益が期待できました。しかし日本は日露戦争で外国からの借金を含め膨大な戦費を使ったので、この鉄道を経営する資金の見通しが立ちません。その時来日中のアメリカの実業者ハリマンが政府に資金を提供するので、〔南満州鉄道を日本と共同経営しよう〕と提案してきました。ハリマンは「鉄道王」と呼ばれ、大陸横断鉄道会社や汽船会社を経営、世界的に有名でした。日本へは鉄道と汽船で地球を一周する交通路を造るという大計画をもってきていたのです。日本はハリマンから多額の戦費を借りておりましたので、桂太郎首相や政財界の人々が千人も集まり大歓迎会催しました。そして、桂首相はこの提案を歓迎し、協定を結ぶ約束をしました。熱心に賛成していた元老井上馨は、日本の安全の為にも良い事だと考えておりました。というのは、日本はロシアの進出を阻止するために日露戦争を戦ったのですが、日本一国だけで満州を守る事はできません。そこにアメリカが入ってくれば都合がよいのです。ところが講和会議を終えてアメリカから帰国した外務大臣の小村寿太郎は、この話を聞くと「とんでもない事だ」といって猛反対しました理由は莫大な戦費を使い数十万の兵士の血を流して手に入れた権利を外国に売り渡すまねはできないし、国民の意思にも反するというものでした。結局、小村外務大臣の意見が通ってハリマン提案を協定を結ぶと言う約束を反故して拒否しました。南満州鉄道は日本だけで経営することになりました。アメリカには日本の危機を救ってやった思惑あったのでしょうか。またこのような権利を考えて、講和会議に臨んだのかも知れません。一寸気まずい後味が残りました。それから四十年後日本とアメリカは戦争をしますが、両国の対立の始まりは、この満州の鉄道利権だったのです。もしもハリマン提案を受け入れていたら日米の対立は別な形になっていたかもしれません。第2次世界大戦につながる対立の遠因になったことは確かです。

・次回のプログラム

2月5日(金)

「クラブフォーラム」

会場 釧路ロイヤルイン 11F

担当：クラブ奉仕委員会

・点 鐘 工藤会長
今週の会報担当：佐藤玄史会員